いらつめ

第五巻の七

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

いらつめ第五十六号目次（明治廿三年六月十日）

●文藝美術……初夏の鐘（唱歌、文章）藤元わさ＝松乃＝櫻陰子＝雪の園主人＝紅花＝山本驚醒＝雁廼家

〇言文一致体を學ぶ心得（一）……山田美妙

〇英國美譚帝の勳功（浄瑠璃）アルフレッド麵麭燒の段……中島萵

〇國々よ飢人多しとれふ此梅雨のふりつゞきけれバ……佐々木信綱

〇五社百詠……俊成卿

〇老女杜鵑を聽く（俳句、和歌）水琴＝神崎ゑい＝福富翠亭＝旭馨女史＝壽子＝奥野やす＝菊ノや露子＝戀山女史＝香酒舍＝山崎ひで＝清水降＝本吉三莘＝横山ひろ＝菊野幽芳＝滑翠＝菊水＝永島芳子＝撫箏女史＝目時絹子＝竹下山人＝紅顔子＝郷廼屋楓＝根本重藏

●通信紹介……智慧袋＝指環＝インキ壺＝女子の務＝角コトヂ箱＝レナリバー＝マルトラバース＝懷中鏡＝以上賣品●安政二年古曆＝右賞品●年齡十七歲少女小間遣＝右雇もとれ口

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二拾九錢郵稅共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵稅共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵稅共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵稅共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六拾五錢郵稅共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵稅共金壹圓九拾錢〇並別両製共前金領収の上で無くてハ差上げぬ事〇府内に限り無郵稅〇每月二回（五日及十八日）發兌〇金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれは妨げ無い事　〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領収の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第四十八號至第五十七號十部版權所有

明治廿三年六月四日印刷　明治廿三年六月五日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號には

初夏の鐘といふ唱歌文章幷に**老女**杜鵑を聽くといふ俳句和歌

中島萵氏の新作**浄瑠璃**佐々木信綱大人の**和歌數首**

俊成卿の五社百詠と**美妙子**の言文一致を學ぶ心得などが出て居ます

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

第二十回懸賞文藝應募得点

題　初夏の鐘（前号つゞき）

○唱歌

（イ）

花ちる夏の夕まぐれ、木の葉がくれの鶯の
經讀む聲に伴ひて、いづくの鐘の響きける。

右無賞　藤元あさ（サカヒ）

（ロ）

春の名殘りの遲櫻、卯の花くだし靜かにて、
露の重げにおつる頃、鳴きにし鳩のいぬる頃、
仄か幽かにかねの音の　あと池水にのこるなり。

松　乃（イヘシロ）

（ハ）

花の木かげに假寐の夢も　まださめやらぬそのひまに
若葉よりくるいりあひの　鐘もかすかにひゞくなり

櫻　陰　子（ミカヘ）

（ニ）

彌生の春の夢さめて、すむ庭の見かへり、
いづくの鐘かしら玉の　露を落して一と二つ。

藤元　あさ（サカヒ）

以上三曲いらつめ一部

（ホ）

雪の園主人（ナリ）

其一

軒端に通ふか祢の音は　霞のころもやれそでゝ、
うざしの玉の色もあせ、香もうつろひし佐保姬の
過ぎにし夫やしたふらん、夕ぐれごとの哀れさよ。

其二

枕にかよふかねの音は　みどりのつら、雲の衣、
白玉眞玉ぬぎかけて、露によろぼふ山彦の
若葉の妻を歌ふらん、曉ごとのたのしさよ。

其三

心にかよふ鐘の音の　宇宙にひゞく大能の聲。
朝な夕なに絶えまなく、盛衰榮枯常あらぬ
過現未來のありさまを　世につげ見たる嬉しさよ。

右第三等賞　紅　花（イセ）

（ヘ）

包む霞ははやはれて、冴のに見たる鐘のおと、
春にまよひし人々の　いかに恨とかもすらん
花にうつるゝもろ人の　迷ひの夢をさまさんと

つきざる鐘のおとさえて、　青葉ばかりの夏げしき。

右の御作はいらつめ二部進呈するだけの價値は充分にありますが應募規則に悖つたゝめ已むを得ず審査以外にいたしました。

○文章

（イ）　　山本鸞匯（チゴン）

十四年の秋頃夫婦の約束は爲せしが幼少にて教育万端不行屆なればそれらの事を修め、充分の準備を整へ二十三年の春を待ちしに、扨歳月人を待たず、八年の流光矢よりも早く今年は廿一年となりしも實際何程の支度も出來ぬ。此向きにては非常に骨を折らなくては迚も婚儀は行なはれまい。併しそれは此方のことなれば如何樣にも致さうが、肝腎な相手の樣子はどうかと思へば平氣の平助平左衞門、何の用意も内々は有るか知らねども表面には更に顯はれぬを見れば折角の約束はよそ〳〵ならでそよ〳〵と、いなの笹原秋風の吹き起りたではあるまいか。　去りとは余り胴慾なと二十一年頃より不平鳴らせし阿孃もありしが、此忘想は二十二年の紀元節の百零一發の祝砲に打破られ、相手の支度の完全したるに吃驚仰天是では此方こそ非凡の勵を爲さずでは三々九度の杯は出來ぬ、四海波靜の唄は出來ぬと周章狼狽、其支度の爲めよ西に東よ奔走中不圖耳よ入りしは山寺の鐘聲今頃合天行らずと見廻はせば四方の眺は陰々たるの流綠樹階除掩映して一々盛なし。　さては夏既に來りしか、婚儀準備に追廻はされ、百花爛熳と咲き亂れしも知らで、墨川の遊も出來なかつた此樣なれば堀切不忍の遊も今年は到底出來ぬ。　然り今度の婚儀開國以來始先ての大婚儀さもありなん。　いづれ此の婚儀濟みし上夫婦共々樂まうと思ふ心は笑止とやいはん、感心とやいはんか。　其忙しさに二十二年の暮れしも知らで、廿三年の夏を二十二年の夏と思ひ居ることの聞くに堪兼て、今年は婚儀の年なりと告げれば猶一層の大周章。　嗚呼首尾良い婚儀が整へば良いが。　開國以來始めての婚儀、さうだから何れ批難の点もあるだらうよ。　其れよしても夫婦の約束なされたる御方の喜びは如何ならん。　吾々でさへ文明の婚儀と思へば嬉しいから。

右評　趣向は新奇ですが修辭がいけません。

（ロ）　　雁迺家

樹々の梢もおしなべて青葉にありました。　で何れが常盤木か見分け兼る程一樣に榮えて居るものゝ、さてそれが凋

むに後れるかは白妙に咲き匂ふてゐる垣根の卯づき花、其れが宛がら音のない涙の樣な、其涙に因縁ありそうな藤の花も今を盛りよ、軒の菖蒲も花橘も時を得貌に我後れじと咲き出でた。何がさて春とは又一入目先の變つた或る夏の初の夕まぐれ、眠むさうな洋燈の火影に物思はしげにぼんやりと佇んで居る一人の少女、

「あゝても月日の立つのは……藤子孃が逝かれてから―もや八ヶ月、藤子孃の世においでなすッた時。おうあの百花園へ手を携へて一緒に……恰度あの時は萩の盛りだッたが、其日から……思へばほんとに藤子孃は……僅か四五日の病患で……天道は是耶非耶と唐土人も言ッたが、ほんとに―何故あれほどの才女を、天が何故早く命を奪ッたゞらう？」

折から遠寺に撞きだす鐘の響に

「おやまア厭なあの鐘！　人の心も知らないで無情な。が、藤子孃と一處に下宿して居た時分、恰度一昨年のあの物淋しい秋の半よ、木母寺の鐘を題に和歌を詠んだり、文章を……其時なぞは鐘の音も何となく優美にも又高尚よも感じたものを……何故今日は此樣なに愁しく感ずるのだらう？」

はつと溜息つく瞬間、又撞き出す鐘の一聲

「おやまた……」

思はず落す一雫、實に亡き友を懷ふ情の切なるならば、夏の鐘とても愁しくは感じもするでしやう！

以上二曲無賞

（八）

藤元なさ（ナカヒ）

淸らのたる曙、淡白い霞の切目から斷續よ漏れ來る遠寺の鐘今此翠の露滴る林の中に昨日は春の跡と尋ねてゐる身には非常よ尖く聞えます。

二十四番の春風よ君王の姿麗しく粧ッて、人は心も長閑よ咲き匂ふてゐる櫻の花陰よ狂ふ蝴蝶に劣らぬ遊びをしたのはまこと此林、そしてそれが漸々昨日の事です。が、今日―一日經ての今日、俄かに變る此眺め―、幾重の木かげ綠濃かよ綴つての雪雲とまで愛でられた其花も「昨夜樹頭の花、今朝地上の塵」、只青芝の上に亂れ、それも半は蝦蟇よ踏みにぢられて、憐れ鐘―今斷續に漏れ來る鐘よ吊はれてゐるやうです。

然しおもへば、世はまこと有爲轉變、昨日の花乙女は今日

の老嫗。榮枯盛衰、夢まぼろし……我も友もいづれ均しく夏木立に遇ひ、そしていつしか眺め淋しい木枯の空をおはち、「くれてゆく秋の記念に置く物ハ吾もとゞりの霜にぞ有ける」の身の上です。あゝ斷えるかと思へバ忽ち續き、續くかと思へバ忽ち斷え、その斷續に鳴る鐘の風情ハはやそれが實相です。

右いらつめ一部

言文一致体を學ぶ心得(一)　山田美妙

是ハ實の處別に排置の順序も何も立てぞ、言文一致体を書く初學の人の爲ほんの手引草、心得だけに記したもので、それ故前後させて考へなければ分からぬ處も有りましやうが、何にしろ私の意見は是でぞ。

言文一致体にはじめて當ッて見て終に經驗の犧牲とも爲ッた、私の文章も書き出しの頃とは今日に至り大分相違して來ました。書き出しの頃には下流に對する語法、即ち何々だとか何々するとか言ひ放しの方が簡略であるから是がよからうと思ッて些しばかり其体で書いて見ました。即ち夏木立第一編などは其方でした。處が後に至ッて如何にもそれではいかぬと考へが付きました。何さま下流の語法は簡略かも知れません。が、どうも伴ふ第一の弊と言ふのも語氣が荒っぽい事です。それも元々下流の語法であるゆゑ、仕方の無い事です。この荒っぽく、ぞんざいな處を直すやうに目立たせぬやうに爲ると自然に普通語法の方へはなれて來て、夫では折角言文一致にした甲斐が有りません。ことに簡略であるも無くもよく／＼見ればもう大した事でも無く、上流中流の語法に比較してほんの僅かばかりの相違であるのです。すると差引きしたところで其弊で其利は掩へず、終にこの下流の語法は用に立たぬと見究めをつけました。浮雲は今日の言文一致体の著述の中、下流語法を用ゐましたが中々うまく語が熟して居ます。が、それでも猶唐突といふ色を始終付いて回ッて居て、下流の語法は唐突を固有とするので以上は迚も誰にも是を去れぬ譯です。

それで上流か中流かの内で撰ぶと、中流が前後によく適して丁度いゝ頃合で、それからして私も「ぬれ衣」、「蝴蝶」いづれも中流にしました。ついで嵯峨のや、思案、漣などの人々及び其他も大抵この風に爲ッた、それも要するに私と同樣の感を持たれて居るからの事でしやう。處が其中流に爲ッて語法に一致がして居ません。嵯峨屋氏の文は殆どよろしいですが、猶まだと思ふ處もあり、其他も同樣、語法が互ひに口癖のまゝに爲ッて居ますぞ。さりしながら今日も今後の日本文をつくる預備の時代で、苟も文を草するに方ッてハ別に法則も何も考へずに唯々筆をその飾ッて居るのが能事でも決して無いけでぞ。今はともあれ、で言文一致体の基礎を中流とさだめた上、さて其中流と如何に言文一致だと言ッて理も何も無く、口から出る儘にするれ

も決して美文とは言はれません。　分からぬもれも言文一致と聞くや否や、何でも角でも言葉をはり亂雑に、野卑に書くべきものだと思ッて、さうして言文一致体をこなしますが、是は所謂眞正れ言文一致体を知らぬからです。　彼等は言文一致れ字面から推察してそれと文として作者の取るべき覺悟の程と思はぬのです。　つまりも言文一致と言へバ、其出來得る處までは言と一致させ、其間始終作者の修辭上文法上の目と以て言語々法れ善良なるのを撰んで行くべきこと、是が心得るべき点の第一です。　言と言ふ物は靈妙なもので始終絶えず變化して行く、其變化の風れいゝ事もあり、悪いこともあり、必要に迫られた事もあり、さうで無い事もある、それに首尾注意して且用ゐ、且矯正して行く、是が文章家の任です。　今世間に名文も中々有ります。　併しながら文の美を求めて汲々として居るものは多くなッても、文の完全を求めて盡力するものも無く、終に此國文の將來に就て空漠として居る人がとが多くあッて、甚しいのは言文一致に筆を染めた方にさへ猶そのやうな冷淡な人が有ります。　實に思ひ至ると隨分苦勞なもの。　中には國文について心配し、或は會などを結んで騒ぐ人もありますが、猶將來の國文の規摸を象る点に至ッても外見れ餅目か、猶不充分としか思はれません。

私が言文一致体に對して考へる肝要の心得は一寸前号通信欄でも言ッたとほり、第一は野卑な語を避ける事、第二は語句を簡略にして濟ませる事、第三は平常の語と成るべく相違させぬ事、これら三ヶ條で、是から箇條書きにして差し當ッた心得を記せば左のとほりです。

一　言文一致体ではことに注意して形容詞を平常の言語と同じにするのを勉める事。　即ち「ウツクシキ花」と言はずに「ウツクシイ花」といふ通り。　ところが飛び入りの言文一致家はよく此處でまちがッて、つひ修練が足りぬに従來の雅体とうッかり用ゐて「ウツクシキ」なとゝします。　言文一致では堅くこゝに一風を執ッて「ウツクシイ」とか「キレイナ」とか言ッて決して「ウツクシキ」又は「奇麗なる」などとは言ひません。　此終りの場合れ「ナ」もつまり「ナル」の進化したもので、言文一致では「ナル」も決してつかはず其代りいつも「ナ」を用ゐます。　また「窈窕タル」などの「タル」、この「タル」も漢語にのみつくもので、場合も少い事もゐ必要によッたら用ゐても宜しいです。　（未完）

國々に飢人多しといふ此梅雨のふりつゞきければ　佐々木信綱

心なの夏のながめや親も子も
うゑてなくといふ人のおほきを……同上

わび人の多しときけば梅雨の
降るも泪のこゝちのみして……同上

心なくふりつゞく雨のさらぬだに
貧しき人の多きことしを……同上

わび人の袖はいよ〳〵くちぬべし
早も晴れなんさみだれの空……同上

わび人の袂はうへやいかならん
をやむまもなきさみだれは雨……同上

梅雨のふりつゞきけるころ

いかばかり此梅雨をわびぬらん
大路にたちて物とうる人……同上

明日こそと思ひてねつる枕のみ
けさも聞ゆる雨のおとかな……同上

折々はをやむとすれど梅雨の
そらさだめなき比にもあるかな……同上

家にのみひたやごもりの我身だに
いぶせきものをさみだれの比……同上

梅雨の晴間まつまに庭のおもは
草はふかくもなりにけるかな……同上

英國美譚帝の勳功(淨瑠璃)

アルフレット麵包燒の段　(前号のつゞき)

中島　蒿

エ、私しは元約克の里に生れ、壯年の頃名は重治と申せしもの。　あなた樣に御別申して十八年、能う御健かに御成長遊ばされしな。　斯く申す私こそ先帝の玉座に侍り、久しく御愛顧を賜り、御仁慈の恩澤に浴し身を盡して仕へ奉りしも、若氣の至り宮中官女の色香に迷ひ。　窃に情を通はせしが、いつか顯れ獄にも入るべき所、先帝特別の思召を以て、事なう御暇下賜はる而已ならず、多くの貨財と窃に賜り、此地に移り此年月、裕に此世を暮まするも、皆君恩の遍き所。　星移り年變り、遂に御國の亂となり、先頃仄に承れば、御所も御城も取崩され、帝王も皇后も行衛知れずと世間の噂さ。彼の君は如何ありしぞ、おいたはしやと眠る間も、忘るゝことゝては御座りませなんだ。　圖らず昨日此茅屋へ御入ありし御容貌、面疲れは在らせらるれど、御幼年の御顏ばせに紛ひなき太子君と見奉りつ丁抹より兼て廻りし繪姿に引合すれば生寫し。　偖は我家へ御入りと心も晴れて嬉さ過分さ。假令此身は碎るとも、おかくまひまうさんと一度は思ひしが、斯く丁抹より繪姿をもて探索最中、我君聰明叡智に在らせ

らるゝも、恐れ乍ら御卄年、御短慮の爲に大事を破る事もやあらんと心と痛め臥たる夕べ、尋の常ならぬ弦音せしは正しく君れ御嗜み。　斯く怠らぬ御所存ならばよもや仕損じ遊ばすまじ。　去ながら玉顏の相形變らせられなば宜しからむと○　思ひ餘つて只今の始末。　粗忽の罪は御許し下置れ。股肱の臣と思召、御心置なふ願ひ奉ると慇懃ふ誠を顯し述べければ、亞爾弗王は感じ入り、推量に違はず吾こそは、と言はんとせしが詞を控へ、これ〳〵痛み入たる御挨拶。　其の君とやらゝ私が似たとて今の御物語。　そりや人違粗忽ばし言給ふな。　私は田舎の下司男生れ付ての獲好そ。　夕べも弓矢の玩弄怪を玉ふは御尤れとながらそりや眞赤なる人違ひと包む風情を見てとる左内、　と奥床しく〳〵。　然らバやつぱりこちの下郎にして、幾年かけて召遣はん。　夫に付一ッの頼み、耻かしきことながら獨娘のあれ花江、最う十六にも成たれバ、分相應の夫を持たせ、安堵せむやと思ふ中、夕べちらりと見付た不儀。　男女の間さることながら、禮儀を亂す娘れ不將。　憎いに換へて可愛いは親の惑と想やり。　なんな奴でも目と懸て遣ふて下され。　頼むぞやと子故れ闇よ踏迷ふ心は嘸と想はれけり。　始終後ろに聞き居る娘、耐へ兼しか轉び出で、傍よ有合ふ鋭た矢の根、取るより早く身を背け、既に自害と見えければ、左内は周章抱寄、手早く矢の根を取上れバ花江はわッと泣出し、どうぞ死して下さりませ

。　やア〳〵死なねバならぬ其譯は。　さアどうした因果か彼の君の縮姿と見初てより、耻しさまで打忘れ、戀れ〳〵て暮せしが昨日はからずお目にかゝり、猶彌増ふ煩惱の燃る炎を防ぎかね、道も禮儀も打忘れ、心一ッよなつこがれて、いつそ忍んで胸れ中、明てどうしてかうしてとお寐間の扉に身を寄て、隙より覗た參らすれバ案よ違ふて君樣ぞ弓矢れ事を一心不亂。　御顏れ凄さ鋭さ。　胸を焦せし色も香も一時お醒めて我と吾心に耻て今更よ前非を悔れバ煩惱れ雲も晴行眞心れ起れバ胸もさぞやうお己が部屋へと歸るさを見付玉ひし父上のお疑ひも御尤も。　去乍君に聊濁はなし。　濁果して私が心。　せめて淨先の端よなと自ら心に勵さを立て、女なのらも御國れ爲先、身を粉ふしても盡さんと、思ふ折から父上れ道を亂せし御詰し。　私しや耻しうて〳〵何と此世よ存生へて、君の御目に懸れましやう。　如何に愚れ迷ぢやとて、清き御身と汚らさしく疑ひらしれ繰言れ元さと言へバ徒らでと。　御許なつて私しが望吁へて死して下されませ。　申〳〵ゝと泣口說れ一途よ迫るぞ不便なれ。　亞爾弗王も膝摺寄、娘に向ひ和よ、なうこりや乙女、細々の話にて、其方れ心底見届さり。　若氣れ至り身を耻て、死なむとせしも理りなれど、斯る拙れ了簡も耻を知て理に疎し。　抑も人れ身も神の賜、私でとに損そるハ神の御罰恐し。　情あるもれゝ身を全ふするこそ智識なれ。　死なんとまでの信義を立なバ、

更に心を勵して、國の大事を盡されよ。　今こそ明す我姓名、汝等が推量に違はず某は英國六世の帝王、亞爾弗王に相違なし。　やがて二人共我國を思ふの貞節。　過分々々。　今改て朕が家臣としてとらすぞよ。　と仰せにハツト親と子と遙下て敬禮す斯と彼方に立聞兩人、髯掻上て顯れ出、やア最前より窺ふ所昨日見えたる奴先に御觸の嚴い亞爾弗王、生捕て褒美の金、覺悟致せと飛掛り、先に立たる源作の助を丁と左内の早技。　うんとのつけに倒れると、見より驚き逃だぞ雁八。　蹴さじ遣じと追掛て、行を留る娘の花江、猶豫する間に雁八も雲を霞と逃散たり。　左内も源作を膝に引敷、御國の恩澤を蒙りながら不義を働く不屈者。　せめて此奴と首途の血祭り。　思ひ知れやと山刀、取手も早く刺通せば、虚空と摑んで息絶たり。　折しも聞ゆる人馬の物音、左内も夫と心附、あれ物音ハ慥に討手。　先刻逃せし彼奴が訴人、油斷ならじと身拵へ、此りや花江、そちや急ぎ母の許へ行、旅の用意を整へて、母諸共皇后宮の御行衛を片時も早く尋ね奉れ。　はい畏ました。　左様なれバ我君父上、隨分御身を大切に。　おゝ吾ハ是れより君の御供仕り、裏山傳ひ此地を去らむ。　申吾君御用意よくも御立なれ。　いざ御案内と先に立、出行左内、殘れハ花江。　名殘惜氣に見合顏。　亞爾弗王も立上り、油斷ならぬ弓矢を手挾、加留亭の里を跡に見つ山路をさして落延けり

（をはり）

五社百詠（つゞき）

俊成卿

○初戀

うれしくハ袖につゝまん思ふこと水のかしてよけふぞ事とふ

御しめ引く卯月のいみをさす日より心にかゝるあふひ草かな

たれとなき空燒物のにほひこそうきたる戀のしるべなりけれ

袖ぬれぬまちのはしかきかき初めてそゑまで遠き道芝のつゆ

しめよりおもふ心ハきはもなし法ハ道をもさこそいふなれ

右御しめ引くの歌ハ新勅撰にも出てゐまそ

○忍戀

忍はすハはさても袖をみすべきにしほりぞかぬるよはのさ衣

いつにせんいハたの小野のしの薄ほにも出すや秋もくれなん

みせもやなしのぶのやのしの薄忍ひわびぬる床のけしきを

秋の野の萩のしげみにふす鹿のふかくも人にしのぶころかな

みちのくの忍ふの里の近からハ立かくれてもにまゝ（本のまゝ）しものを

○不會戀

いたづらにゆふともなはて歸る哉君ハふせやにおひぬ物ゆゑ

契りあらハ世々の哀もいふへきをあはすハ何か恨みしもせん

あふ事ハなきさによするうつせ貝むなしき涙にぬるゝ袖かな

ぬる夜なみて夢たにみえハ自からあはする人もあらまし物を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

身となけて生田の河に流れても猶ふせなくてハ何にかハせん

○初會戀

朽はてゝよるハ衣をかへす哉またとけしとや猶はれなりとや

錦木ハ千つかハ數にけふみちてけふのはそ布むねやあふへき

契りあれや今夜ふしみハ里にきてくさハ枕をかはしそめつる

ひとりハみなけきし床を君かため打はらふにも袖ハぬれけり

逢坂ハせきもるかみに手向せしぬさハしるしハ今夜なりけり

○後朝戀

わかれつる床にこゝろをとゝめおきて霞にまよふ春ハ明ほの

くれにもと契りおけとも杣川やいかゝの床ハひきそわつらふ

くれを待つ命さりともなからめや今朝ハ別のなそやかなしき

浦ちとり入江ハ涙になきまひて明けてそいつるなりわけの空

わかれてこし道のつゆにもまさりけり衣々になるしのゝめの袖

○逢不會戀

うつるかハ隠れし袖にちりなからぬれ衣とやはいひはなつへき

現にハあはぬけしきに情なくてみしをハ夢にいひなさんとや

なさましや袖ぬれてこそむすひしか又かけみせぬ宿のまし水

浦山しなたりの嶺のそりま弓そり〇てましと引き〇〇しせん

名を立て我つらきともいふへきに只戀しきそわりなかりける

○旅戀

夢ちにハなれしやともうつしなハうつの山人の蔦ふける庵

露ふかき野原の草のまくらこそ戀のなみたもきのはさりけれ

ねするなと契りし宿ハいかゝならん野にも山にも面影そたつ

難波めの蘆のきのやいしのすゝき一夜のふしも忘れやそする

夢にこそミやこの事もみるへきと袖に涙こすち〇のしのふのま

右難波めの歌ハ續千歳集にも出てゐます

○思

ふかゝらぬ澤のはたるの思ひたに身よりあまるハ哀ならすや

戀しきも思ふもゑことゝこひしけれ戀の思ひとなにかことなる

水とりのうけるこゝろの淺きたに下の思ひハなるとこそきけ

ひとりすむ森の神にもとひてきけ思へハこそハ思ふとハいへ

戀しともうきをつらしと恨るも思ふこゝろのふかきなりけり

○片思

よとゝもに我のみおもひくたくらん岩うつ磯の涙ならなくに

あちきなやつれなき人と徒にれもふ思ひのをしくもあるかな

さきの世の我身そつらき君かためかゝりけれはや報ひ成けん

涙かけるいもねにつけるおもひ貝なや片戀のたくひなるらん

中々にう〇ちの島の人ならてうきにおもひをかへましものを

第二十回懸賞文藝應募得點

題　老女杜鵑を聽く

○俳句

時鳥老女をもすりおこしけり…………水　琴（ハリマ）

時鳥老女ののぞく數寄屋かな…………同　上

耳たこふ子規聞く老女かな…………神崎ゑい（ハリマ）

杖捨て彳む姥やほとゝぎす…………福富翠亭（トウケイ）

以上四句無賞

山姥よ敎えられたり郭公…………旭響女史（ハリマ）

糸繰る姥の手止むや郭公…………福富翠亭（トウケイ）

母刀自の耳また嬉し杜鵑…………春　子（トウケイ）

時鳥啼くや老女か庵のつき…………神崎ゑい（ハリマ）

以上四句いらつめ一部

宵寢せし老女さとし時鳥…………奥野やす（サカヒ）

耳さとき名取のうたや時鳥…………旭響女史（ハリマ）

以上二句第三等賞

夜延する婆の果報やほとゝぎす…………春　子（トウケイ）

右第二等賞

○和歌

いろも香も失せてあとなき五月雨の
いまのわか身よなく時鳥…………菊のや露子（オホサカ）

ほとゝきそ啼きゆく方はかはらねど
遠くきこゆる心地こそすれ…………総山女史（キヤウト）

右評　題意外充分ですが珍らしい趣向のため取上げました

いつもゐはさけてたのしふ時鳥
そと先のむかしおいのてよひも…………香鶴舎

ほとゝぎす今あきつるときゝにしよ
わかのしらにも雪ぞふりける…………山埼ひで（トウケイ）

柴の戸と老女明れは久方の
雲の下行ほとゝきそかあ…………清水臨（ハリマ）

老の坂越え行をむな杖とめて
嬉したあきくほとゝぎすかな…………本吉とは

老の女のあからふほともとしの夜を
あきてぞ過るほとゝぎすのあ…………同　上

年々に物わすれせて老の女か
やもあおとあふほとゝぎせかあ…………横山弘子

うつせミの身そこれ老のちゝそきや

梢かすめてほとゝぎすなく…………菊野幽芳(イバラキ)

さよふけて空鳴き渡る子規
老女の夢にとどやとふらん…………滑翠(トウケイ)

以上十首無賞

時鳥宿にも來鳴け老か身の
乙女の昔おは忘れまじ…………滑翠(トウケイ)

年ごとに鳴く音かはらぬ時鳥
乙女の昔思ひこそやれ…………菊水(トウケイ)

年ふりて昔しを忍ぶ賤の女の
ねさめとどふか山ほとゝぎす…………横山ひろ(カガ)

老の女の訪ふ人もなき門にだに
折りく名のるほとゝぎすかな…………本吉みや(カガ)

老の女のこゝろさびしき窓の戸を
明け暮れにきくほとゝぎすかな…………同上

ほとゝぎす來るく軒端のいよすたれ
まきかへし待ゝきくは幾とし…………永島芳子(ギフ)

さかりなる花のいろかもうつろひて
とやかどゝぎすなきにける哉…………山崎ひで(トウケイ)

ほとゝぎすみなきくときそいまもなほ

をとめのむかしおもふなりける…………香麺舎

老の身のねかへぬまゝにつまどをば
なく行くそらにほとゝぎす啼く…………撫箏女史(ミノ)

我夫ときゝし昔を思ひ出に
あはれに聞こゆ郭公の聲…………總山女史(カガ)

いにしへを老のふなくなそよもすから
なくさめて鳴山ほとゝぎす…………目時絹子

花の色うつり果にしおくなにも
やまほとゝぎすむかしをそとふ…………同上

以上十二首いら川め一部

身をつみてむかし思へばうばすての
山ほとゝぎすこゑぞ悲しき…………目時絹子

世を忍ぶつまとはなれどほとゝぎそ
聞ねばまさる老のさびしさ…………竹下山人

耳うときおむなありとや時鳥
軒はちかくも鳴て過らむ…………横山ひろ(カガ)

なれわびて聲もふんぬる郭公
あはれおうなの如何にきくらん…………菊野幽芳(イバラキ)

ほとゝぎす聲のみはして影もなく

残る老女やすがたなからむ……同　上

郭公過よしつまにことつてむ
なすとも知らぬ身とはなりしと……紅　顔　子（ヤマグチ）

以上六首第三等賞

老いぬれどわびつゝすめりほとゝぎす
我ごのなれつまにかくとつげてよ……郷廼家楓（ロスヘ）

右第二等賞

白妙のれうなごの髪を卯の花と
見てや鳴らむ山ほとゝぎす……横山弘子（ヒロガ）

右第一等賞

老いぬれば淋しきものを我身のみ
山郭公音づるゝなり……根本重雄（フクシマ）

ほとゝぎすなけど姿は白雲よ
弓張月の見るよしもなし……同　上

時くれば促がさずとも散るものを
しばしば迫まる子規のな……同　上

うれしくもまた恨めしく覺のあり
よそぢをいそぐ聲とおもへば……同　上

春をうとし夏来たふとは聞きしかど
秋とも捨てぬやとゝぎすかな……同　上

なはむかしそのべといふや夜をこめて
かくれ家近く鳴く時鳥……竹下山人（フクシマ）

老のみのつゝく五月雨いまはうしと
雲井に告げよ夕ほとゝぎす……同　上

夏なれど目覺めがちなる老のみぞ
しりてや夜になく時鳥……同　上

心して聞かましものを老の耳
たゞ一聲のなごりとしらば……同　上

わが住の宿はむかしとしのぶ草
忍びかねてやなく時鳥……永島芳子（ユタフ）

一聲を心ならずも聞きそ初めて
みぎしことを思ひでにけり……郷廼家楓（ヤマグチ）

暗く聲は去年にかはらずほとゝぎす
としにふりゆく我れぞかなし……同　上

年々にかはらぬ聲と珍らしゝ
暗く郭公をれにきかせば……同　上

さなきだに物思ひ居ればほとゝぎす
いずまなるらんうかるねになく……同　上

あし引の山はとゝぎすこゑさけバ
ありし昔を思ひ出るかな…………同　上

そのあたりあかるきまでの卯の花に
姿かくしてはとゝぎすなく…………同　上

てる月に姿かくしてはとゝぎす
我れにこたへよともにうらみむ…………同　上

今そはや年も老曾の郭公
おのれや聞かん庵守りつゝ…………奥野やす（十七才）

さなきだに思みだるゝ老の身は
血になくこゑをいかにきくらん…………撫箏女史（ミノ）

あはれ世にたのみすくなき老の身の
こゝろ知りてや啼くはとゝぎす…………同　上

まつ人にこゑをとしそてものおもふ
わがやにあれるやまはとゝぎす…………同　上

老の身をなぐさめなんと問とふぎそ
なのるをきけバなかく〳〵にうき…………同　上

はとゝぎす血になくわれをにしの方
たれしそふかきくにゝそちびけ…………同　上

以上二十三首審査以外

通信紹介規則

㈠通信物品紹介文掲載と望む者は原稿共に掲載料及保証料を送る事㈡掲載文に對し約定を望む人は其代金及保証料を送る事但し此保証料は相手の掲載文の保証料と同額の事㈢掲載料は五号活字廿七字詰一行金五銭宛、保証料は一行五銭宛㈣雑誌發兌の十日前に受取った申込は其号、十日後のは次号に載せる事㈤紹介文掲載申込後其取消請求が有ても領収金員は返さぬ事(六)紹介文掲載後約定望人が既に出來、そして掲載申込人が取消請求した時には双方の保証料を悉く最近のいらつめに換へて約定望人に返す事(七)約定望人が一時に二名以上有る時は約定申込書の郵便の消印れ時刻で前後と定める事(八)既に一名の約定人が出來た時は第二の約定人には別段返事を出さず其代り第二約定人の保証料と最近のいらつめに換へ、其他の代金は三十銭以下一割増の切手又卅銭以上は爲替で返済をる事、但し返送料は其内から差引く事(九)約定望人が有れバ本社は直に郵便で掲載申込人に其趣を知らせるに付き通知得次第掲載申込人は其品物を運賃自辨で本社へ送るべき事、本社では品物と引換に、代金を卅銭以下一割増の切手卅銭以上爲替掲載申込人に支拂ひ、直に其品物を通運便先拂で約定望人に送る事、是等の場合に於て保険を望む人は豫め其由と言込む事、但し保険料も自辨の事(十)約定出來の上は約定双方の人に各保証料と最近のいらつめに換へて返す事(十一)此約定は最も双方の誠實と信ふ事ゆゑ其間に双方共虚僞と挾んで爲らぬ事、品物其他共本社では紹介するばかり其品に就ての責には一切任せぬ事、物品差立の荷造も成丈丁寧にして封印と打て置くべき事、本社では決して之を開封せぬ事(十二)其實物に接せず偏り誠實から成立つ約定ゆゑ申込人も其品物の体裁を眞實に記すべき事(十三)掲載の文には本人の姓名を秘す事、但し本人から姓名宿所も掲載れ命が有れバ例外(十四)以上規則に因つて取扱ふ物品ハ普通の小さな物に限る(十五)以上諸條の犯則ハ悉皆沒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

書の事●(一)奉公口は紹介周旋又は對し紹介約定申込の有れば本社から其趣と本人に通知する事但し是は物品と違ひ其後は事に本社で干渉せず都て双方の勝手に任せる事

此規則を些ばかり印刷して讀者諸君の中の一部分に過日諸配付した所早速諸方の賛成を得て左の通りの件々が申込になりました。　創業の事ゆゑ數も種類も少いですが、やがて諸君の愛顧によつて益増加する事と信じます。　番号は欠けて居るのは最早約定濟になつたのです。

○賣拂

(一) 明治十二年七月から十二月迄の智慧庫、一冊も欠本無く、賣價參拾錢……東京芝

(二) 鍍金細手指環、直徑一分余の紫水晶入、彫無し沸鉾形賣價四拾錢、但鍍金は厚し……東京本郷

(四) インキ、壺赤黒二室付、總ガラス、チシ蓋、賣價四拾錢……東京麹町

(五) 中川重麗氏譯女子の務、一二度しか讀まぬ、無記名、賣價五拾錢……横濱

(六) 純銀角コトヂ管、長さ並、銀性上等、七拾錢……東京築地

(七) ミス、メレー、ホルムス女小説レナリバア、至急賣却賣價二拾五錢……東京神田

(八) リツトン作小説マルトラバース、賣價二拾五錢、但し上等の製本……東京築地

(九) 姿見製上等厚二分の懐中鏡、幅二寸縱三寸五分、裏面に寫眞の入場あり、賣價八拾錢……東京番町

○買入

(十一) 安政二年の略暦一部……東京神田

○雇入

(十二) 年齢十七歳の女子、小學校卒業生然るべき保証人あり、諸禮を覺えたい志願、給料望無く……東京下谷

○懸賞文藝新題

○第廿三回題(唱歌に限る)　右　午睡美人　六月廿日〆切

○第廿四回題(唱歌文章に限る)　右　採蓮女　七月十日〆切

○第廿五回題(何でもよろし)　右　盆燈籠　七月廿日〆切

○第廿六回題(文章に限る)　右　谷は螢　八月十日〆切

○第廿七回題(何でもよろし)　右　源氏を讀む　八月廿日〆切

○第廿八回題(何でもよろし)　右　世中は人の品定め　九月十日〆切

右は男女に限らず或は夫、或は妻、いづれにしろわが望む理想の佳人君子の品定めと言ふのです。

○第廿九回題(何でもよし)　右　子の生れた時の親心　九月廿日〆切

○第三十回題(唱歌文章に限る)　右　殘夢　十月十日〆切

近頃應募者は中に褒募規則に背くものが有りますが是から其作の巧拙に關せず犯則は容赦なく審査外にします。

右文藝懸募者心得

第一 題と趣にして成るべく趣向と立てるれを尚ぶ事○第二 唱歌淨瑠理及び文章は各一千五百字以内の事○第三 一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四 原稿には宿所姓名明記の事○第五 原稿は半紙に限る事○第六 第二第三第四及び第五に背くものは沒書。

賞品　一等は方には菊水摸樣の金又は銀杯

これまでへいらつめで二等賞以下を賞しましたが此度から次の規則を實行します。即ち二等を三度取つたもれ、三等を六度取へるそれ、一部を十八度取つたもの以上は一等と同じ賞品を與へる事。この三つの場合を操り合はせて一等と同じ資格にあれば直ちに賞品を送ります。

六月　成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●眞理第八號

（毎月一回發兌 五月廿日發行）

目次

眞理
基督教者の爭論と眞理の方針
基督教特に聖書の歷史的攻究ハ諸派一致れ最良法なり……シユミーデル
女子教育に付て……天苑居士
雜錄
經世文鑑
エルンスト、フナン、井ルデンブルヒ氏及其著……ルードルフ博士
幽靈……（ゲルレルト氏著 よし子譯）
跛れ國
獨逸慈善事叢の一班
世ノ慈母！
怪姓名
ヂツケンスの手紙
傳記
ケシヤーブ、チエンドルセン氏小傳……さ、そ、
カール、ゲーロツクの終時……（グスタアブゲーロツク手記 樂水眞人譯）
文園
摘英
雜報
還行●福音同盟會●農省商務の斷●政府の第二策●窮厄ハ一なり●無據如斯●府下の二大紛議●新潟縣會の解散●日本帝國將に二日なゝんとす●獨逸學復活？●獨逸講文會●日宗教評論●東京音樂學校●上野圖書館●上野博覧會●愛知のヒ實●教育品●無情く●小婦強盗に聖經を續すしめんとす●品性とは何ぞ●存娼●女學生●露國大學校の閉鎖●●大英外國聖書會社●インフエルエンザ流行熱發生の原因●米國宗教界れ顯象●法皇レオ第十三世●葡萄牙のアメリア女王●二人の法王●酒は防寒の用をなさぬ●マイニンゲン陪審裁判所の璧書●デーリッチ教授逝く●稀代の名實嶺の月●ブラジル國の法令
普及福音教會錄事

發行所 東京市駿河臺鈴木町十一番地 世光社

毎月一回

知玉叢誌

五月廿日第卅五号目錄○日本文の人稱區別法ハ西洋文より完然なり●浴湯れ種別●土佐日記十一日れ條に就て●菖蒲會雜話●文久年中れ滑稽引札●俗語俚諺根據纂●披書知昔●人丸赤人優劣の辨●菓子七種の起原●おこそ頭巾の考●十日の月ニ就て●清水濱臣白川樂翁公れ歌を評す●鷹と隠れ相違●會友雅興（歌）●會費郵稅共一ヶ月金五錢五厘●見本ハ郵券五錢にして呈す

横濱太田町六丁目　知玉學會

女學生

女學生ハ全國女生徒れ手ヨ成れる文章、詩歌、繪畫等を掲載し、益々女界の文學を進開せしめんとす、世の女子たるもの、常に之を讀ミ、足らさる所ハ互ヨ指摘して愈々女學の進歩と計り、他れ勝れる所ハ取つて以て自ら補ひ、世ヨ處して女子の價値を示さゞる可からず、女子れ位置と高からしむるの方只夫れ其價値を示すになる哉、女權を擴張するの道只夫文章あるかな、世れ女學生たるもの夫れ奮起せよ

第一号ハ去る廿一日發兌○掲載の目次●跡見花蹊女史の眞事題女學生と云へる絶句なり、字々活氣を含ミ讀者をして神氣爽快ならしむ○花洲女史れ押毫ヨかゝる水邊の石竹（挿畫）優にして閑なり祝辭ヨハ淺井さく子、平岩愃保、佐々城豊壽、古莊三郎諸氏の寄せられたる名文あり●社説にハ「女學生」と題して岩本善次氏の起草せられたる者あり●ひかり氏の文學會ハ一校の生氣なり」、雲峰氏の「吾人素志」と云へるより各赤心誠意以て女學生ヨ關して述る所なり●文欄ヨハ京濱七女學校の生徒廿名の文章及和歌あり、各々其特得の長所顯ハし、女界の文欄ハまさに是れ千紅萬紫咲き亂れん美と競ふの觀あり●講武欄にハ女學の武道と題して天知子れ論文あり報告欄にハ各女學校文學會れ摸樣を記す、

次号よりハ更らヨ公評欄を置きて第一号に關する世人の批評を掲ぐべし○寄書欄にハ女子諸君より寄贈せられたる文章と載すべし○女生交詢ヨハ女學生相互れ問答を記さん、全國れ女學生諸君續々玉稿を投せられん事を乞ふ

毎月一回廿日發兌○一郵五錢五厘○郷稅五厘

發行所 富士見町二丁目一番地 女學雜誌社